
ドット・アイ - 挑戦者 -

Rod

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドット・アイ - 挑戦者 -

【Nコード】

N5951T

【作者名】

R o d

【あらすじ】

少年ジュリアスと、少女フィリアが住む村では、次々と異常なことが起きていた。突然干上がった川。枯れつつある森。雨は降らず、土地は干上がってゆく。王都の黒い影・政府・策略・切り捨てられた駒。愛すべき人々。守るべきは誰か。何か。——そして、『ドット・アイ』と呼ばれるものたち——。

ジュリアスとフィリアは村を、国を、世界を救うことができるのか。異世界ファンタジーです。

0・Declaration

静かに揺れるその金髪を

穢そうとしているのは誰？

純粋なまま何も知らず

生きていくことは罪でしょうか

お人よしな『賢者』

気の強い『村娘』

彼らと共に生きるたくさんの人々

彼らには

守るべきものが多すぎるのです

自分を犠牲にしても

それは守るべきものなのでしょうが――

それらを全部放り投げて

小さな平和を生きることとは

彼らには許されないのでしょうか

彼らの前に立ちただかる壁は

何よりも強大で

その名を『世界』と言いました

その名を『政府』と言いました

その名を『運命』と言いました

生きて。

そう願うのはあまりにも

自分勝手なのでしょうか――

りない賢者と、

運命を背負ってしまった

捧げる。

まだ頼

世界の

彼らへ

1・賢者の息子

サロナという村があった。

サンディアナ王国に属するが、王都からは随分遠く、中央政府の支配も及ばないような田舎である。

その村を抜けて、すぐの森の中、朝日のよく差すひらけたところに、少年が寝転がっていた。

金髪の髪に、肌は白い。目を閉じているので、瞳の色は分からなかった。綿の鎧を身にまとい、腰に剣を提げている。一見軟弱そうだが、よく見るとしなやかな筋肉で覆われているのが分かる。

やわらかい風が、そっと彼の頬をなでた。鮮やかな緑が、空のモザイクのように上空にかかり、さわさわと小気味良い音を立てる。

突然、彼の頭の方の茂みが、激しくゆれ、音を立てた。風ではない。

しばらくして、彼の背丈ほどもある黒い物体が唸り声と共に宙に飛んだ。瞬時に彼に覆いかぶさる。

次の瞬間、彼はすでに動いていた。

開かれた瞳は、空のようにすがすがしい。腰の剣の柄を見る間もなく抜き去り、黒い物体に振り下ろされた。

ガスンという音がして、小さな鳴き声と共に黒い物体が地面に崩れる。

「なんだ、野狼じゃないか。まだ子供だな…」

少年は、剣の柄で首元をうった狼を見、つぶやいた。しばらくして、怯えたように狼がよろよろと立ち上がる。

「ごめん。痛かったか？」

少年はあらわになつた刀身を鞘に納めると、狼に人間の匂いをつけてしまわないようにと、適度に距離をとって話しかけた。

「ここから先はダメだよ。僕の村の人達に見つかったら、捕まってしまう。——大丈夫。僕は君を捕まえるためにここにいるわけじゃ

ないから」

狼はしばらく痛みに震えているようだった。少年は、怪我をしていないか見ようと伸ばしかけた手を引っ込めた。

やりきれない顔で狼を見つめる。群れに戻ったときに、人間の匂いがついていては追い出されてしまう。

「…君たちのような獣を傷つけるつもりはなかったのに…。僕はね、最近この辺りで見かけられている正体不明の怪物を見つけなくちゃならないんだ。頻発してる畑荒らしも、見たこともないくらい巨大な足跡も、その怪物の仕業のはずだ。——そして、もし危害を加えそうであれば、処分、または移動させなくちゃならない」

狼はようやくすっかりした足で立ち、一声鳴き、森の奥へと消えた。

「…怪物は、処分しなくてはいけないんだろうか」

少年は一人、誰も居なくなつた森でつぶやいた。空を見上げ、空気を思い切り吸う。

「今夜は、雨が降るな」

2・村の少女

サロナ村には、ささやかだが川が流れていた。

フィリアは、その川に水を汲みに来ることを日課としていた。水で満たされた水がめを自分の隣に置き、川の水にずっと指を浸す。冷たい流れが、心を洗い流していくようだった。

農作物が主な収入源となるこの村では、子供たちも重要な働き手となる。フィリアも、まだ十代半ばごろの少女であったが、水汲みも洗濯も、ほとんどの家事が彼女の担当であった。

フィリアはしばらくそうしていたが、いつまでもぐずぐずしているわけにもいかず、水がめを持ち、立ち上がったところへ、

「フィリア！」

フィリアは声のしたほうへ顔を向けた。

「ルヴィ。おはよう」

ルヴィも、フィリアと同じく水がめを手に使っていた。

「おはよう。今日も涼しいわねえ。助かるわ、一年中こういう気候だと」

そういつつ、手にした水がめに水を汲んでいく。フィリアは水がめを地に下ろし、ルヴィが水を汲み終わるのを待った。

「そうね。でも、私は暖かいところにも住んでみたいわ」

ルヴィが水で満たされた水がめを持ち上げ、フィリアに並ぶ。

それとはなしに、二人は歩き出した。

「まあ、極端に暑かったり寒かったりしなければあたしはいいわよ。でも、そうね。灯のないところには住みたくないわ」

「灯のないところというと、人里はなれた山とか？」

ルヴィは笑った。

「それもあるわ。でも、村を一步出ればそこは闇よ。夜に一人で村から出て御覧なさい。フィリアなんて泣いて戻ってくるに違いないわ」

「そんなに弱くないわよ」

反論するフィリアに、ルヴィは「どうかな」と楽しそうに言った。

「…そうだ。村の外と言え、あなたの幼馴染が見張りのために森にいるそうじゃない」

「私の、幼馴染…？ジルのこと？」

ルヴィはうなずいた。

「そうそう、ジュリアス。最近見かけないと思ってたんだけど、どうも『例の怪物』の正体を確かめるとかそんな事をさせられてるらしいわ」

「ルヴィ…。また自治会の会話を盗み聞きしたのね」

フィリアが笑って言う、ルヴィはぺろっと舌を出して見せた。

「あたしたちだって村人なのよ。大人たちばかりで決めて良いわけないでしょ？」

「私もそう思うわ」

フィリアが真顔でそう言うと、ルヴィはぷつと吹き出した。

「だから、あたしあんたが好きよ」

「そりやあどうも」

「…でも、危ないわよね。怪物の正体を突き止めるなんて。たとえ『次期賢者』だとしても、私達と歳が変わらない子供に任せるなんて」

ルヴィが眉をひそめていった。

「そんなこと言ったらジルに怒られるわ。…どうしようもないぐらいに真面目だから…」

フィリアがため息と共にもらす。

「そうね。純粹すぎるし」

ルヴィが茶化すように言う。

「心配してあげなさいよ。そうじゃないと、気付いたら大人にいいように使われていそうだわ、ジュリアスは」

「…そうね」

フィリアは空を見上げた。

「嫌な予感がするわ」
雨の匂いがした。

3・夜の訪問

夜になると、雨が降り出した。

少年はテントの中で干した果実を食べていた。育ち盛りの少年が、それだけで腹がいっぱいになるわけもなかったが、文句も言えない。何しろ、彼はサロナの『賢者』の息子なのであるから。

突然、テントの垂れ幕の下から白い手が覗いた。向こう側から、灯も見える。

「誰だ！」

少年の青い目に険しさが宿り、腰の柄に手が伸びる。しかし、すぐに彼は緊張をといた。

「君か」

「久しぶり、ジル」

テントの垂れ幕を勢いよく上げたのは、栗色の髪の少女だった。右手に小さめのたいまつを掲げ、左手に傘を持っていた。腕にはバスケットを提げている。

彼女は傘をテントの中に入ると、傘を置いた。視線をジュリアスによこして、言う。

「そんな顔しないで頂戴。…想像の範疇ではあったけれど」

幼馴染にそういわれ、ジュリアスはしわを作っていた眉間を、指でこすった。

「…どうして君がくるんだ、フィリア」

「差し入れを持ってきたのよ。最近どうせろくなものを食べてないでしょ」

ジュリアスは途端に渋い表情を浮かべた。フィリアも、バスケットからビンとパンを取り出しながら顔を歪める。

「その顔、やめてって言ったじゃない」

「こんな夜遅くに、一人でこんなところに来たらダメじゃないか」
「怪物が居るから？」

「それもあるけど…」

ジュリアスが困ったように口ごもる。フィリアは笑った。

「大丈夫よ。あなたが私に何かするなんて、誰も思っちゃいないわ。だから私をここに送り出したんじゃない」

ジュリアスは目を丸くした。

「君は、村の人たちに言われてここまで来たのか！」

「大まかに言えばそうよ。…細かく話すと少し違うのだけれど」

そういつてフィリアは言葉を濁した。

「詳細は、更に僕が気に入らないものなのか？」

「そうかもしれないわ。聞きたいの？」

「ぜひとも」

ジュリアスは方眉を上げて話を促した。

「…実は、誰もジルに差し入れに行きたい人がいなかったのよ。それで募集していたから——」

「君になつたつて言うのか！」

ジュリアスが言葉をさえぎって怒鳴った。

「やっぱり気に入らなかったわね」

「信じられない！君よりもずいぶん適した人たちがたくさん居るはずだ！まだ子供でしかも女の子を一人で森に行かせるなんて！しかも、怪物の出るといふ森に！男が一人で野営するテントに送りこむか普通！」

ジュリアスは首を横に振ると立ち上がった。

「村の人達には僕から言う。早く帰ろう。送っていくよ」

ジュリアスに腕を取られたフィリアは、その指をほどいた。なだめるように声を和らげる。

「そんなに急ぐことないじゃない、ジル。もう来てしまったんだから、いつ帰ろうと同じことだわ。それに、ビンやバスケットは持つて帰って来いと言われているの。あなたが早く食べてくれないことには帰れないわよ」

その辺りに捨ててもいいけど、とフィリアが付け足すと、ジュリア

スは顔を歪めたままその場に座って胡坐をかいた。

「…そんなこと、出来るわけないだろう」

ジュリアスはそう言ってビンの酒とパンを食べ始めた。

「それはよかったわ」

フィリアはつぶやいた。

3・夜の訪問（後書き）

フィリアとジュリアスの絡みです。

女の子が難しいです…。

自分が気に入る子にしようとすると、同性って逆にむずかしいですね。

4・帰路に着く

ふくろつゝの鳴き声がする。葉が怪しく揺らぐ。月明かりが地面を照らす――。

同じ森であるのに、昼と夜では正反対といえるほど、明と暗の顔を持つ。夜闇に浮かぶ緑の森は、ただただ怪しく、心細さが募るだけであった。

森の奥の暗がり、ふいに明るくなった。揺らいでいる炎は、たいまつのものであろう。

同時に足音が、地面を伝って聞こえてくる。

一人。――いや、二人か。しばらくすると、話し声が聞こえてきた。一つは深みのある少年の声。もう一つは、澄んだよくとおる少女の声である。

「大丈夫か、フィリア」

「平気よ」

鳥が飛び去る音がし、フィリアは盛大に首を縮めた。

「そんな様子でよく言うね」

悪気なく言ったジュリアスを、フィリアは睨んだ。

「……よく恐ろしくないわね、こんな森の中で」

「もう慣れたよ」

ジュリアスは、地面に足を取られないように注意深く下を見ながらいった。

「いやな慣れだわ」

フィリアが身震いしながら言うと、ジュリアスは顔を上げた。

「そうかな」

「そうよ」

「どうして？」

フィリアは黙った。

どれくらい歩いただろうか。

来たときには、もっと短い距離のように感じていたのに、とフィリアは思った。なぜだかは分からないけれど。

ジュリアスが口を開いた。

「村の様子はどうか？ 畑がまた荒らされたりしていない？」

フィリアは首を横に振った。

「大丈夫よ。私が知らないうちに何かあったかも知れないと思って、一応村長にも確認をとったけど、あなたが森で監視をするようになつてから、ぶつとりとだえたそうよ」

そう言つて、フィリアはジュリアスの瞳を見る。青い、空のような瞳は、たいまつだけの明かりの中で、黒々として見えた。

「…そういう情報さえ知らされていなくて、あなたはどうするつもりなの？ 村のみんなは『賢者』に託したといつて楽観的だわ。自分は何もしなくていいと思つているのよ。だけど、実際は『賢者の息子』だし、まだ子供だし、村の人たちよりもさらに楽観的だし。いったい、あなたはどうするつ——」

フィリアの目を、ジュリアスの瞳が真つ直ぐのぞきこんでいた。

「どうしようか」

ジュリアスは迷いのない口調で言つた。

「たぶん、いつか道は見つかるよ」

「…楽天家もいいところだわ」

「いい志しだろ」

ジュリアスがにつこりと笑い、フィリアは額に手を当てた。

「世界一よ…」

「もうすぐだ。村の明かりが見える」

ジュリアスは、フィリアの皮肉に気付かずと言つた。

「君を一人で行かせたことについて言い聞かせなくちゃならないな…」

前方を指差し、その後に言葉を続ける。

「…道は見つかると思うけれど、フィリアに心配をかけたくない

から、情報を交換してくるよ」

森の中に、少年と少女。

赤く光る謎の瞳が、二人を凝視していたことを、彼らが知るよしもない。

4・帰路に着く(後書き)

会話をかいているのが好きすぎて、気がつくと会話ばかりになっています。

5・サロナ村

「『賢者の息子』が帰ってきた！」

村は祭りのようなさわぎだった。ほとんどの村人が外へ出てきて、ジュリアスを見ようと好奇心に目を輝かせる。見世物じゃない。フィリアはそう思い、なんだか気分がよくなかった。

村の空気は浮かれていたが、次のジュリアスの言葉で、水を打ったように静かになった。

「怪物を退治してきたわけじゃないんだ」

重苦しい沈黙が降り、しばらくしてとまどいのさざなみが広がる。

「村長、話がある」

ジュリアスは厳かに言い、村の集会所へ向かった。そのとき、フィリアは異変に気付いた。隣で、ほとんどの村人達と同じように好奇心に満ち溢れた友人の肩をたたく。

「ルヴィ。おかしい」

「え？何が可笑しいって？」

ルヴィが浮かれた声で答えた。フィリアが切羽詰った表情で首を横に振る。胸騒ぎが収まらない。胸がむかむかした。気分が悪い。

「笑い事じゃない。どこにいるの？」

ルヴィはまだ笑っていた。「え？」

フィリアはルヴィの肩をつかんで大きく揺さぶった。動悸がおさまらない。おかしい。

「どこにいるの！ルヴィ、あなたなら知ってるはずでしょう！アキレスさんはどこにいるの！」

「…え。ア、アキレスさんが来てないって…？」

ルヴィは夢から覚めたばかりのような、ほつけた目で言った。

「嘘でしょう…、ありえない…」

ジュリアスの最愛の父にして、『賢者』であり、ジュリアスを真っ先に迎えるはずの男が、この場には欠けていた。

フィリアは顔を大きく歪めた。ルヴィも知らないなんて、…おかし…い…。ぷつぷりと血管が切れたような感覚が彼女を襲い、頭の中でガンガンと、聞いたことのない声が響いた。

次の瞬間、村のとまどった空気を、甲高い悲鳴が貫いた。

「嘘！フィリア！…どうしたの！フィリア！」

フィリアはルヴィの膝の上に崩れ落ちていた。額に玉の汗を浮かべ、大きくあえぎ、時折苦しそうに呻く。

「フィリア！フィリア！」

ルヴィのパニックに陥った声に、村人ががやがやと集まってくる。

「…おいっ、急病人だ！」

「急いで運べ！」

「医者を呼べ、医者を！」

ルヴィと、苦しむフィリアを取り囲み、周りで村人が右往左往する中、ルヴィは啞然と空を見つめていた。

「一体どうなってるの…」

ルヴィの魂の抜けたような声が、中途半端に空気に浮いた。

5・サロナ村（後書き）

突然動き出したようなサロナ村。
しかし、まだまだ発端です。

6. どうして

ジュリアスは固い面持ちで祭司の家に入った。

彼と一緒に、話し合いに来たのは他三人。祭司と、狩猟長と、女長である。ジュリアスは、もちろん、フィリアを一人で森に行かせたことと、お互いに持っている情報の交換をするためにここにきていた。しかし、ここに来てさらに重大な問題が加わった。これだけは、絶対に聞いておかねばならない。

彼は椅子に座り、開口一番言った。

「父はどこか具合でも悪いのですか」

祭司はカミーユと言う名の年老いた老人だった。彼は沈痛な表情で眉を下げる。

「気付いていたか」

先ほどの村人達の輪の中で、ということであろう。

「当たり前でしょう」

ジュリアスが険しい顔つきのまま答える。

「気付かないはずがない」

カミーユは黙ってしまった。その顔をそつと見た女長のローザがため息をついた。彼女は、ほっそりとした体に、深みのある瞳を持っていた。まだ若いのに、女長になった理由でもある彼女の知性が、あふれ出るような、生気を帯びた目だ。

彼女はゆっくりと、悲しみを湛えた声で告げる。

「『現賢者』は病に伏せていらっしやるわ」

「それならすぐに見舞いに行かないと……！」

腰を浮かしかけたジュリアスを、狩猟長が止めた。彼の名はワルターと言った。戦士のような、屈強な男だった。その彼の、固い筋肉に覆われた腕が、ジュリアスをつかむ。

「……見ないほうがいい」

しばらくして、ワルターが言った。

「見れば、お前は少なくともショックを受けることになる」

「…どうして！」

ジュリアスが叫んだ。

「どうして、実の父が倒れているというのに、息子が見舞いにも行つてはいけないのですか！行かせてください。それに、ショックを受けるとは一体どういうことですか」

それに、とジュリアスが続ける。それに。

「…それに、あなた達はそのことを僕に告げてさえくれなかった！」
ジュリアスの瞳は、憎憎しげに揺らいでいた。

「どうしてだ！」

そう叫んで、彼を止めたワルターの胸倉につかみかかる。

「全てを説明してくれ！そうでないと…、そうでないと僕は…っ！」

ジュリアスはその場にへたりと崩れ落ちた。顔を両手の平で覆う。

「僕の家族はもう、父以外に…いないというのに！」

見かねたローザが、ジュリアスの肩をそっと抱いた。

「…ジュリアス。私達も、あなたに教えようとしたわ。だけど、無駄に心配させてはいけないと思ったのよ」

「無駄につて…！現に心配するような状況じゃないか！ショックを受けるぐらい、ひどい状態なんだろう？」

ローザは悲しそうに言った。

「もちろん、そうだわ…。だけど、私達にも、アキレスがどうしてあんなったのか、全く分からないの。そんな状況で、あなたに過酷な現実を突きつけることは出来なかったわ」

「さっきから含みのある言い方だな。一体、父さんはどうなってますかというんですか」

ジュリアスの瞳が、不安そうに動く。誰もが口をつぐんでいた。自分から切り出したいくないとでも言うように。

「植物状態だ」

カミーユのしわがれた声が、突然空気を切り裂いた。ジュリアスの目が大きく見開かれ、ローザとワルターは何も言えずただ悲痛な面

持ちを携えている。

「三日前の朝、いつもの様に村人達の農作物について、助言をもらおうとして家に行ったが、彼はそのとき、まだ起きていなかった。太陽と共に起きる奴が、珍しいこともあるものだと思っただけで、その場はとりあえず家に帰った。しかし」

カミーユは言葉をいったん切った。からからに乾いた唇を、唾で湿らせる。

「しかし、彼は夜になっても姿を見せなかった。だから、皆で様子を見に行ったのだ。そのときは既にもう」

カミーユは言葉をつなげながら、立ち上がると、後ろにあったカーテンを大きく引いた。カーテンで仕切られた向こう側の部屋にあったのは――。

「息をしているだけの、ただの人形だった」

一つのベッドと、その上で息をつむぐ男の姿だった。

6. どうして（後書き）

サロナ村には長が四人居ます。

『賢者』と『祭司』と『狩猟長』と『女長』です。

賢者が最も偉いといえは偉いですが、身分差等の違いはほとんどありません。賢者は、普通で言う『村長』の進化バージョン的です。

7・熱病に浮かされて

翌日、太陽は実に高く上っていた。きらきらと輝く光を、緑の葉が散るように反射する。

風はさらさらと気持ちよく、爽快だった。

サロナ村では、ジュリアスを取り囲むように小さな人の輪が出来ていた。

「ジュリアス。もうすこし、頼むよ」

そう厳かに言ったカミーユの隣には、ローザとワルターが立っていた。二人は、その言葉に同調するようにうなずく。

「はい」

ジュリアスもそれにしつかりとうなずきかえした。そうして、カミーユだけに聞こえる小さな声でつぶやく。

「父さんのこと、よろしくお願いします」

カミーユは小さくうなずいた。

村人達には、ただの風邪だと言っていた。いずれはばれてしまうだろうが、それを明かすのは今ではないほうが良いと、カミーユたち三長が決定したためだった。謎の怪物たちのこともある。村人を、これ以上不安にさせる必要はない。

怪物のほうは、ジュリアスが森に番に出てから、一度も姿を見せていないので、大丈夫だろうということになったのだが、念には念を入れるために一週間だけ様子を見ることにしたのだ。

カミーユ以外の人々は、何も言葉を発さなかった。ただ、見守るように、どこか特殊なものを見る目で見ていた。

ジュリアスはきびすを返して森へいこうとし、視界を一瞬よぎった顔に目を留めた。

「ルヴィ」

彼女は、落ち着かな気にジュリアスを見ていた。結わいた髪はほつれ、目の下にはクマが出来ているようだ。ルヴィとジュリアスは、

友達でこそなかったが、フィリアを通していくらか仲がよかった。
そうでなくても、これほど小さな村のことである。同年代の者は、
皆顔なじみであった。

「どうしたんだい、そんなに疲れて…」

「それが…ジュリアス…」

ルヴィは何者かを恐れるように身を恐縮させた。

「フィリアの…具合がよくないのよ」

ジュリアスの目が陰しくなる。

「何か、あったのか」

「何もないわ。…何も…」

ルヴィは心底疲れきっているようだった。目が次第につつろになり、
徐々に焦点が定まらなくなる。

「きつと…ただの風邪だと思うの…。でも、昨日からずっと苦しん
でいて…」

きつと、一晩中傍についていたのだろう。

「見舞いに行く」

「だめよ！」

ルヴィは必死の形相でジュリアスの袖にしがみついた。ジュリアス
の目が丸く見開かれる。

「…絶対に、だめ！フィリアはあなたに会いたくないと言っている
の…！お願い…ジュリアス。お願い」

ジュリアスは口ごもる。

「でも…」

「お願い！」

ルヴィの懇願する瞳を、ジュリアスがじっと見つめる。

数分後、ジュリアスは袖にしがみつく手をそつと開かせた。

「分かった。フィリアが嫌がるのなら、行っても仕方ない」

「——本当に！」

「うん。ルヴィも、少し休んだほうがいい。まともに寝てないんだ
ろっ」

突然周りの視線が気になったのか、ルヴィは途端に顔を赤くした。

「そうね…。そうだわ…。取り乱してごめんなさい」

ジュリアスは顔を横に振った。

「ありがとう…フィリアの傍に居てくれて」

ルヴィは険しい顔つきをして、力強く首を横に振った。

「友達として当たり前のことをしたまでもの」

「彼女は、良い友達を持ってるね」

「ありがとう」

ルヴィとジュリアスは、暖かい笑みを交わした。

「じゃあ、もう行くよ」

身を翻して森に向かいかけたジュリアスの袖を、何者かが、そっと軽くつかんだ。

「待って」

真剣な顔つきに、どこか笑顔を滲ませたルヴィは、ジュリアスにだけ聞こえる声でそつと言った。

「何があっても、フィリアの味方で居てあげて。あの子の傍にいてべきなのは、あなたなのだから」

「…それは一体どういう…」

「行つてらっしゃい」

ルヴィはにこやかに手を振った。ジュリアスは背中を押されるように森へ向かう。

「なんだったんだ…？」

森に入ったジュリアスは空を仰いだ。

それにしても、どうしてフィリアはジュリアスと会いたくないと言ったのだろう。何か、怒らせてしまったのだろうか。ジュリアスには、検討もつかなかった。心当たりもなかった。

足元を見て、可愛い青い花が咲いているのを見とめると、思わずジュリアスは茎の根元を折った。

「この花をあげたら、フィリアは僕を許してくれるだろうか…」

細い指でぐるぐると茎を回す。青い花が回った。

「僕は、君に、何をしてしまったんだろう」

一陣の風が、青い花びらをさらい、散った花びらが空気にくるくると、

舞った。

1・来客者と次期賢者

そうして日はたった。

一週間後、草の根を踏み分けて歩いてくるジュリアスは、どこか凛々しく、荘厳な空気をまとっていた。たった一週間の生活だったが、父の病を背負った上での森での生活は、よほど彼に何かを与えたようだった。

「カミーユ！」

村の前でジュリアスを真っ先に迎えた司祭に、ジュリアスは笑顔で駆け寄った。

「……よく無事で帰ってきた！」

そう言った司祭は微笑を浮かべていたが、背後に巨大すぎる負担を抱えているように見えた。

「カミーユ、やっぱり父さんの体調は……」

カミーユはゆっくり告げた。

「あのまま、変わらない。悪化してはいないが、良化もしていない」
ジュリアスは覚悟していたのか、悲しそうに薄く笑った。

心配げに顔色をみるカミーユに、ジュリアスは力強く言う。

「大丈夫だよ。心配要らない。僕が、父さんの分まで村を守るから」
カミーユは頼もしい言葉に目を細めた。ジュリアスの言葉は、頭からつま先まで全部信用できると思った。彼の身体から、いろいろなことに対する覚悟がにじみ出ている。

森で、彼は相当辛い一週間を過ごしたのだろう。カミーユは途端にいたたまれなくなった。

怪物の監視は、ジュリアスに任せてはどうかと提案したのは、カミーユであった。『賢者』は世襲制である。いつかはジュリアスが賢者を継ぐことになるのだ。十八になったのであるから、もうそろそろその準備を、と彼の父親に口ぞえした。

自分が賢者の後継者として、本格的に仕事に携わるようになった

タイミングを見計らったような父の病である。

相当な重荷を背負っているのだろ。

カミーユの力の及ぶことではなかったにしろ、それを自分が助長したのではないかという疑いが拭いきれない。

「それより、ローザやワルターはどうしたんだ？…もしかして、あいつらも難病につ！」

途端に険しくなったジュリアスの顔を見て、カミーユは慌てたように彼を押しとどめる。

「違うんだ。思いがけない来客があつてな。そっちの対応をしている。すまない、村の護衛をしてもらったも同然なのに、迎えが私しかない」

ジュリアスはそれを聞いて落ち着いたのか、ほっと一息つくと穏やかな笑みを見せた。

「そんなことは気にしていないよ。そもそも、賢者というのはそういう役目だし、この村に属している以上村に奉仕するのは当たり前だ」

立派な青年になった。カミーユは思ったが、その言葉は飲み込んだ。

違うのだ。もともと、ジュリアスは立派な青年だった。何よりも、強かった。知っていたはずなのに。

ここは、心配したり情けをかけるべきではない。

彼を、後押しするために、するべきことはそんな事じゃない。

「頼りにしている」

カミーユはようやくそれだけ言って、ジュリアスと一緒に歩き出した。

「あの…、カミーユ。フィリアの容態を知らないか」

ずっと視線がさまよっているように見えたのはそのせいだったのか、と思い、カミーユはうなずく。

「まだ完全に回復したわけではないようだが、随分良くなったと聞いた」

見舞いに行くか。とたずねたが、ジュリアスは静かに首を横に振った。嫌がられているのに、押しかけることは出来ない、と。

「その思いがけない来客って言うのは、誰のことなんだ？」

ジュリアスが意図的に話題をそらしたことがわかって、カミーユは口を開きかけた。

「ああ、それは…」

「ジュリアス！」

カミーユの言葉をさえぎって、高い声が怒鳴った。

カミーユとジュリアスが首をめぐらす隙さえなく、人影がジュリアスの前に立ちはだかつていた。不意に鋭い金属音が鳴り、刃と刃が互いに交わる。ジュリアスは不意打ちにも関わらずしつかりと剣を抜いていた。

対する相手は、豊かな赤髪を風になびかせ、顔に余裕の笑みを浮かべている。

「お、上達してる。速くなったなあ、ジュリアス」

「貴様に言われるすじあいはないっ！」

ジュリアスは叫んで剣の刃を勢いよく跳ね返した。

赤髪の男が後ろへ飛び退く。

「なんだよ、親愛のしるしだろ。そう怒るなって」

「そういわれても虫唾が走るだけだ！お前と馴れ合った覚えはないんだよ、レヴァン！」

カミーユはあっけに取られたまま二人を凝視している。二人の關係を考えることさえ忘れていた。

レヴァンと呼ばれた男は唇をゆがめて笑った。

「なんだよ、ちゃんと名前覚えてるんだな。ほら、友人だろ」

「そんな訳があるか！」

今度はこちらから切りかかろうとするジュリアスの前に、レヴァンは掌を突き出した。

剣を構えない相手に切りかかるわけにもいかず、ジュリアスが剣を降ろす。

「お人よりは治っていない、と」

「村の客人を血で汚すわけにはいかない」

ジュリアスが横を向いて吐き捨てると、

「そうすねるなよ」

レヴァンが薄く笑い、ジュリアスは嫌悪感をさらに表情に滲ませた。
「ええと」

場の空気を読み、ようやく驚愕から開放されたカミーユが口を挟む。

「おまえ、この放浪士と知り合いなのか」

「知り合いも何も」

レヴァンがジュリアスの肩を叩いて言う。

「友人です」

「違う！断じて！」

ジュリアスが吼える。

「…そんなに犬猿な仲なのか、ジュリアス。それほどお前が声を荒げるとは、珍しい」

おそろおそろ口にしたカミーユの言葉に、ジュリアスは赤くなる。

「いや、気にしないでくれ。すまない、取り乱して」

「ジュリアスが声を荒げるのは、友人と好きな女に対してだけです
よ」

「嘘だ。カミーユ、聞き流してくれ」

ジュリアスは、今度は静かに告げた。ちえ、とレヴァンがつぶやき、ジュリアスの肩から手を離す。

「でも嘘じゃないぜ。だってあれだろ、フィリアに対しては大声出すんだろ」

「どうしてそこでフィリアの名前が出てくる！」

ジュリアスは吼えるように叫んでから、すぐに顔を覆いたくなくなった。
どうして今、そんな事で取り乱す必要がある？今の発言は適切ではなかった。自分は一体何を考えているんだ。

「…すまない」

気まづくなつた空気に、ジュリアスの余計な謝辞がさらに気まづ

さをのせる。

重い沈黙が三人の間に横たわり、レヴァンが小さくつぶやいた。

「お前、ほんとに分かりやすいんだなあ…」

「…どういう意味だ」

自分の言動にため息をつきながらジュリアスが答える。

「そのままの意味だよ…」

レヴァンは言葉尻を濁した。

「とにかく、話は私の家についてからにしよう」

「ああ、そうだ。戻らなくちゃな」

レヴァンはカミーユの言葉に同調して明るく言った。

「おれ、歓迎会無断で抜けてきたからな」

しばらく沈黙が降りる。

「…き、貴様ーっ！！！！！」

ジュリアスは、本日何度目かの怒鳴り声を上げた。

今日はまだ長い。

1 来客者と次期賢者（後書き）

やっと乱暴な奴を登場させられました。ここから先は会話がスムーズに行くと思います↑

2・不吉な予兆

ジュリアスとレヴァンは深夜の森に来ていた。

——二人が出会うこととなった因縁の森である。

フィリアが訪ねてきたときの森より、闇が深い気がするののは気のせいだろうか。それは、二人が背負ってきた気の重さによるものなのかも知れなかった。

つい先ほどまでつづいていた、宴会など、当の昔に過ぎ去ったような空気だった。

「どうして来たんだ」

重たい口を開いたのはジュリアスだった。彼が腰掛けた檜の木の枝は太く、黒々としている。それだけで森の生命の強さを感じさせるほどだった。この森は生きていた。いろいろな意味で。

ジュリアスも地面から遠く離れた空中に居たが、レヴァンはもっと上方に居た。大きなブナの木の子に、ハンモックをかけて、宙で揺れている。

「どうしてつてのは、どういう意味だよ」

「ドット・アイが来るのは、不運の始まりだ」

「村を心配してるのかい」

「そりゃあ、そうだ」

ジュリアスは憮然として答えた。口調の端々に、レヴァンと会話することそのものの嫌悪感がにじみ出ている。

「おまえと会ったのは、ちょうど一週間前。森の見張りを改めて任されたときだ。そのときは、おまえがドット・アイだということを聞いて、不運の運び屋だと聞いて、確かにと思った。友人は熱病にかかるし、何よりも——父さんが倒れていることを聞かされた」

ジュリアスは一瞬苦悩の表情を浮かべたが、次の瞬間にはもとに戻っていた。人に弱さを見せてはいけない。それを信念に生きてきたのだから。

しかし本人は、感情がただ漏れであることに気付いていない。

「だが、まだ一週間しかたっていないというのに、村にやってきたのはどういうことなんだ。しかも、村人達には自分がドット・アイであることを隠して！」

「不運を運んでいるじゃない。不運があることを予期してやってくるんだ」

レヴァンが、ジュリアスの頭上から律儀に訂正を入れる。

「…今回も、そうなのか」

ジュリアスの問いに、ややあつてレヴァンが答える。

「そうかもしれないが、そうでなければ、そうではないということになるな」

「言葉遊びを求めるほど暇じゃないんだが」

ジュリアスは、言葉に苛立ちを滲ませた。

「そうか。それなら時間の無駄だ。さつさと家に帰って寝ろ、ジュリアス」

「なれなれしく名前を呼ぶな」

ジュリアスは静かにつぶやいたが、返事は期待していなかった。

そもそも、その前の問いも、もっと前の問いも、レヴァンが答えないことは分かっていた。もう既に、ジュリアスは知っていたのだ。全ての問いに、自分で答えられることを。直視したくない事実から目をそらしているだけだということを。

静かに闇が下りる。森から見る空には星が溢れていた。

思えば今日の朝まで、森で野宿していたのである。それを思い出すと、ジュリアスは身体に極度の疲労を感じた。

今日ぐらいいは熱いお湯で汗を洗い流したいし、森の寝床よりはましなベッドでぐっすり寝付きたかった。

しかし、彼は自分が思った以上に疲労を重ねていた。

「綺麗だな——」

そうやって、星を見上げているうちに、ジュリアスは夢へと引きずり込まれていった。

3・失態

はじめに聞こえたのは、甲高い悲鳴。騒がしい鳥のさえずり。そして、ひたひたと忍び寄る不吉な影の足音。

ジュリアスは、朝に弱いほうではなかった。

しかし、その日だけは、珍しく不快な目覚めとなった。

悲鳴を聞いて飛び起きる。

悪い夢でも見たように、身体中汗でぐっしりだった。脳裏にフイリアの面影がうつすらと見えている。悲鳴——？が、どこことなく彼女の声に似ていたような。

そこまで考えて、ジュリアスは飛び降りた。悲鳴？何かあったのか。

——飛び降りた？ベッドから？

違う。木からだ。

周りを見回すと、うつそうと緑が茂っている。一週間、あまりにも見慣れすぎた光景だった。家に帰っているはずなのに、と困惑し、寝てしまったのだと思い当たる。はっとして頭上を見ると、ハンモックは空で、レヴァンの姿は見えない。内心舌打をする。

新たな悲鳴が耳元をかすった。

今度はもっと、空気を切り裂くような、悲痛な悲鳴だ。そして何より、今度は絶え間ない。たくさんの人々が、皆そろいもそろって逃げ惑っているような。

しかもそれは、村の方向からする。

ジュリアスは何も考えず駆け出していた。嫌な予感が胸をよぎる。

——いや、それは、予感というよりも直感に近く、それよりも確信に満ちていた。

村で、何か起きている。

はるか頭上では、鳥達が叫びまわり逃げ惑うように旋回して、風は追い立てるように木々を揺らす。

どうして。何が。

自分がいけなかったのだろうか。ここ一週間のうちに、何かが起こる予兆があったなら。

——自分がそれを、見過ごしていたとしたら。

ジュリアスはきつく唇を噛んだ。思わず視線を地面に落とす。土の上に広がった、突然目に飛び込んだ景色に、目を見張った。

なんてことが起っているんだ！

もうすでに、自分が役立たずだと証明されてしまった。祈ることなんて出来ない。全ては、責務を果たせなかった自分のせいだ。

氣力を振り絞り、全力で駆ける。祈る権利なんてないのに、今の彼にはそれしか出来ない。

頼むから、どうかみんな無事で居てくれ——！！
神なんて、居ないのに。

こんな状況下でさえ、そんな事を冷静に考えてしまう自分が、たまらなく無慈悲な人間で。

駆けることしか出来ない自分は、ひどく無力だった。

無事で、無事で、無事で、無事で……。

口の中で繰り返し、ひたすらその言葉を唱えながら、くつきりと土に刻まれた、巨大すぎる足跡を踏みつけた。

3・失態（後書き）

前回に引き続き、少しばかり短めになりました。
次回はレヴァンの活躍です。

4・対峙

初めに目に飛び込んできたのは、燃えるように赤い髪と、人間の背丈の五倍はある巨大な怪物だった。

唖然として立ち尽くしたジュリアスに、突如横から衝撃が加わる。「どいてろ！」

聞き覚えのある声の罵倒とともに突き飛ばされ、すぐ横の木に緑色の物体が突き刺さった。

「なんだよ、これは……！」

全体にうろこが生え、生々しい粘液の垂れたそれは、よくよく見れば怪物の腕である。突き飛ばされていなければ即死だ。気色の悪さと、突然襲い掛かった死の近さに吐き気がして、ジュリアスは口を押さえた。

「馬鹿かおまえは！」

最初に突き飛ばされた時と同じ声がし、はっと我に返った。

「さつさと武器を構えろ！死ぬ気か！」

物心ついたところから鍛えられてきた反射神経は、無意識にジュリアスの体を動かした。前から来た衝撃を、しっかりと剣で受け止める。襲い掛かってきたのが何なのか、理解するより先に体が動き、それを切りつけて薙ぎ払う。ウロコが生えているせいで、傷は付けられない。

その一撃で、今までの迷いやうろたえが全て薙ぎ払われたかのように、ジュリアスの瞳に青い光が宿った。

中央に躍り出て、冷静に周囲を見渡す。怪物は、さっきの腕と同じく、全身にウロコが生え、腐臭をまき散らす粘液に覆われている。手足と尾が四本ずつあり、それがどれも直径が人間の胴以上ある。

こんな物体が、この世のものであっていいものか。

再びぞつとし、吐き気が上がってくるが、それをこらえた。

家々が怪物の下敷きになっているが、村人の姿は無い。あちこち

で土煙が上がっていて、視界が良くないが、見える範囲では屍も見えない。

安心するにはまだ早すぎるのだろうか、思わず安堵を感じた。剣を構えなおし、怪物をしかとにらみつける。

その時、かすかな重みが背中にかかる。

「悪い、遅れた」

静かに標的を見据えながら、ジュリアスは背に声をかける。

「寝坊しすぎだ、馬鹿野郎！」

レヴァンは、乱れた息を整えながら、舌打ちをジュリアスに贈った。

背中合わせになった二人は、周囲に油断なく目をはしらせた。怪物の目が、二人をとらえたのがわかる。繰り出された手足を切りつけてはかわす。

「レヴァン、村人は」

「おれが誘導して崖の下の洞穴に逃がしたわ、阿呆」

「悪い。おれの役目を」

「心配するな。借りは三倍で返せ」

怪物がうなりを上げ、二人に巨大な手を振りかぶる。飛びのいた二人は、同時にそれに切りつけた。

「ジュリアス、どうする。このままじゃ埒が明かないぜ」

「ああ！あまりにも巨大すぎる」

「四本ずつある足も厄介だ。ウロコが固すぎて傷一つ付けられないし！」

ジュリアスは、次々繰り出される手足を華麗によけつつ、レヴァンに問う。

「なにか案があるのか、おまえ」

レヴァンはジュリアスを見やった。

「ない！」

「かつこ悪すぎだぞレヴァンっ！」

「遅れてきた貴様に言われたくないわ！」

「仕方ない。ここは正面から向き合うしか…っ！」

しばらく逃げつつ様子を見ていた二人は、地面を蹴って怪物と向き直った。怪物の咆哮が響く。どろどろとした粘液が地面にぼたぼたと垂れる。

「気色悪…」

「…今吐くなよジュリアス！」

迫ってきた腕を切りつけようとした、その瞬間、ジュリアスの視界に青い色が映った。

レヴァンの息をのむ様子も、わからなかった。ジュリアスは、青い色に目を奪われていた。もっといえば、青い色を身にまとったその人間に。

「……フィリア、どうして」

戦場に、突如登場したのは、青い服を着た村娘だった。

5・この小さな世界を守れるなら

二人の前に突如現れた少女は、静かに怪物を見据えていた。

「フィリア！」

ジュリアスが再び名前を呼ぶ。彼は、こちらを向こうとしない少女の肩を痛いぐらいつかんだ。

「何してるんだ！早く村人達のところへ…」

「いいのよ」

「フィリア！」

ジュリアスのそれは、ほとんど悲鳴に近かった。

怪物はすぐ目前まで迫っている。

「何がいいんだよ。早く戻れって！」

ジュリアスの手にさらに力が加わる。肩の肉に爪が突き立っても、彼女は怪物を見据えたままだ。

「いいのよ。いいから早く逃げて」

「さっきから何なんだお前は！」

レヴァンは、フィリアの肩を離そうとしないジュリアスの腕を、剣の柄で打って無理やり離させると怒鳴った。

「いきなり出てきて、何をわけのわからないことを言ってるんだ！ジュリアスを守りたいなら黙って隠れている！おまえがこいつを混乱させていることが分からないのか！」

突如横から緑色の物体が空を切り、レヴァンの背を強打した。

「レヴァン！」

ジュリアスが叫ぶ。もう一度視界に緑がかすめ、ジュリアスはすんでのところで剣を構えた。金属音と共に、ウロコと剣がぶつかる。

「大丈夫かレヴァン！」

レヴァンはジュリアスの問いに呻きで答えた。少しずつ立ち上がる彼を見て、ジュリアスは安堵の表情を浮かべる。

「二人とも、逃げて！」

フィリアが震える声でふいに叫んだ。

「全ては私の責任なの。私がいなければ、私が指示に従っていればこんなことにはならなかった！」

フィリアは叫びながら怪物の前に駆け出した。

「フィリア！」

「熱でうなされている間、ずっと頭の中で声がしていた。村を襲う怪物が、ずっと私に語りかけていた！自分の巢へ来いといわれていたの！そうすれば村には一切危害を加えない。お前の熱病も治してやると言われていた！それでも私は行かなかったの！」

「フィリア止める！」

「嘘だと思っていた！こんなの夢だと思っていた！でも、怪物は夢の示した日時に現れた。場所も一ミリもずれていなかった！本当だったんだ！全部本当だったの！」

フィリアは怪物の元へ走っていく。スピードを落とす気配など一切見せない。粘液が彼女の前にボトリと落ちると、フィリアは悲鳴を上げたが、それでも足は止めなかった。喉から嗚咽が漏れかける。いけない。今はまだ。

めちやくちやになった村をむりやり見回した。

家が崩れ、森が焼け、畑も井戸ももうどうにもならない。

村人達のこれからの生活はどうすればいい？餓鬼で死んでいくのか。そうやってこの村が、地図から消されるのだろうか。

怪物が怖い。

「だから逃げて！きっと私が行けば、この事態は収まる！」

「ダメだ、フィリア！」

ジュリアスがフィリアの後を追って駆け出す。突如横から加えられた鈍い衝撃に、ジュリアスは数メートル吹っ飛ばされた。痛みにあえぎ、うずくまる。それでも立ち上がるうとする。

「やめてジュリアス！」

フィリアは、後少して怪物の元へたどり着くところだった。彼女は傷一つついていなかった。怪物が攻撃を避けているのか。

「…ジュリアス！彼女はまだ大丈夫だ！今行けばお前が先に死ぬぞ！」

怪物がフィリアを殺す動きを見せないことに気付いたレヴァンが叫ぶ。しかし、ジュリアスは聞いていなかった。再び前へ進もうとし、怪物の腕になぎ払われる。剣でかろうじて受け止めるが、それでも身体は飛んだ。とがった腕が、ジュリアスを串刺しにしようと、とてつもないスピードで迫る。

腕が貫かれていた。それと同時に腹に衝撃が加わる。彼は血を吐いた。

「ふざ…けるな…！」

「お前だ馬鹿野郎！」

レヴァンがジュリアスの腕を貫いた、ウロコに覆われた物体を切りつける。剣先をウロコの下にもぐりこませると、血が吹き出した。怪物はすばやくその腕を引き込めた。

ジュリアスは叫んだ。だれのことも見えていないそのにこった瞳は、狂人のそれと化していた。またもや剣を構えるジュリアスの腕を、レヴァンが押さえ込んで怒鳴る。

「ジュリアス、聞け！フィリアはまだ大丈夫だ！」

ジュリアスは聞いていなかった。野生の動物のように吼えて、押さえ込むレヴァンの腕でさえ切りつけようとする。

そのとき

「ジュリアス、聞きなさい！」

フィリアがありったけの声で叫んだ。

「私はあなたに、傷ついて欲しくないのよおっ！」

フィリアは後数センチで怪物に触れそうなところまできていた。ジュリアスが立ち上がったのが見えた。綺麗な青い瞳が、灰色にこったのが見えた。

声がふるえてしまう。唇をかむ。それでも、嗚咽は抑えきれなかった。喉が引きつる。目から何かが流れ出るのを抑えることも出来ない。怪物に身をささげれば、救えると思っていたものが、どんど

んにごっていく。溢れていく。何かが体から抜けていく。大切なものを全部落としてしまう。

「だめえっ!」

そのとき、目の前で何かが光ると同時に、爆音がとどろいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5951t/>

ドット・アイ - 挑戦者 -

2011年10月10日06時11分発行